

「面会謝絶とは、どういうことですか」

極秘施設を訪れた界塚伊奈帆は、面会室ではなく応接室に通された。応対した数人の職員から、とにかく面会はできない、ということは何度も告げられる。理由を聞いてもはつきりしない。監理官が対応していて、戻り次第説明いたします、というやり取りに、不満と憤りと歯痒さが今にも破裂しそうなほどに大きく腹の中で膨れ上がったが、伊奈帆はそれらをぐつと飲みこんでソファに浅く腰掛けた。

一人でじっとしていると、時計の秒針が出す音がやけに大きく聞こえる。目を閉じると、嫌な想像ばかりしてしまう。これまでだって、何回も面会できないことはあったのだ。スレインの体調不良が主な理由だが、今回の職員の慌て方は少しおかしい。ふと手を開くと、手汗がひどいことに気づいた。知らず、ため息をつく。

生きていればいいが。

出された茶の湯気が消える頃、急いたノックと同時に扉が開かれた。慌てて来たのか息の上だった男は、申し訳ない、という内容の挨拶を数通り口から吐き出した。この施設の最高責任者である。伊奈帆はソファから素早く立ちあがり問い詰めた。

「我々も、想定外事態で。指示を待っているのです」

伊奈帆より三十以上年上の男は、困り果てた表情だった。頭は切れそうもないが、実直で話の分かる年上の下官、と伊奈帆は認識している。監理官である彼との付き合いも、この極秘施設の発足と同じ二年ほどになる。

「彼に、何があつたのですか」

監理官は額の汗を指で拭い、言いくそくに口ごもった。

「…その、囚人が、……発情しまして」

思ってもいなかった言葉に、伊奈帆も一瞬言葉を失う。

「発情？ まさか」

文官出のこの職員は伊奈帆の迫力に気圧されながらも、背筋を伸ばして次の言葉を発した。意外と担力がある。この施設を任されているだけのことはあるらしい。

「失礼ながら、少尉はアルファだとお聞きしておりましたので、面会は危険だと判断したところで」

絶句して伊奈帆は脳内に検索をかける。発情。その言葉が適用される人類は、全人

口の三パーセントにも満たない。まさか、と思った。何度も読み返した彼のパーソナルデータには、そのようなことは記載されていなかったはずだ。

「オメガ性だ？ 検査しなかったのですか」

「もちろんしました。しかし、おそらくはフェロモンが分泌されておらず、検査では判明しなかったようです」

番のいないオメガはフェロモンを分泌するので、検査でわかるのだ。検査方法は、血液を抜き取りフェロモンの性質と濃度を調べる。発情期が最も分泌が多いが、定量的に微量のフェロモンは分泌されている。それが分泌されていなかったということは、どういうことだろうか。そもそも、オメガの発情期は三カ月に一度やってくる。これまでの二年間、全く確認できなかった。まず、本当に今回の騒動はオメガの発情期だろうか。よからぬことを考えた施設職員の不祥事を隠そうとしているのではないのか、と思考が突っ走る。

だって、もし彼がオメガであつたなら、アルファである自分が真っ先に気づくはずだ。どうも理屈が通らない。

「被害は？」

「幸い、ありません。看守から、様子がおかしいと報告を受け慎重に対処しましたから」

その現場を想像して、伊奈帆は嫌な気分になった。

「…それで、今はどういう状況ですか」

「抑制剤と、一応避妊薬も投与して、独房で拘束しています」

伊奈帆は思わず顔を顰めた。念には念を、ということだろうが。

「扉越し…いえ、カメラ越しにでも、見ることは？」

「いけません。これは私の個人的な判断ですが。少尉はアルファです。お忘れなく」

案外強情だ。これほど職務に忠実な男だとは知らなかった。

「フェロモンは、分泌されていないのでは？」

「それが不思議なのですが。先ほども、簡易キットで検査したところですよ。ですから、本当にオメガなのかどうかもはっきりとは断言できません。しかし抑制剤は効いておりまうので、念には念を。何が何やら我々にもさっぱり。…フェロモンの反応は見ら

れないとはいえ、我々ベータには感じ取れなくても、アルファの少尉は反応するかもしれない

「…わかりました」

この時点で必要な会話は終了した。伊奈帆は応接室のソファに深く腰掛け、冷めきつた茶を一気に飲み干した。監理官に告げる

「僕はここにいます。指示と一緒に待つことは、止められませんよ」

「…わかりました」

男は仕事に戻ると言い残して、その場を去った。

伊奈帆は壁にかかった時計を見た。先ほど時刻を確認してから、三分しか進んでいなかった。

応接室で一人残されてから、既に三時間二十分が経過している。途中、何度か抜け出

してスレインに会いに行くことを試みた伊奈帆だが、職員たちはあからさまに伊奈帆の挙動を監視していた。確かに、自分の一人歩きした評判とこの施設での立ち居振る舞いから、その対応は適切だと言える。伊奈帆はソファに深く腰掛け、ぐっと目を閉じ考える。熱くなるな。無茶はもつと先だ。少なくとも、まだ自分の権利を手放してはいけない。

「本日中に移送との指示を受けました」

ようやく表れた監理官の言葉に、勢いよく立ち上がる。移送だって？

「移送？ 正確な時刻は？」

「それはまだ…研究所の職員の到着が先だと」

検診をして、移送先の管轄を決めると。聞いてもないのにそこまで話してくれたのは、この人の人柄だろう。伊奈帆は重ねて問い詰める。

「研究所？ どの？」

「軍の管理するオメガバース研究施設です」

「口実は？」

あまりに直接的な物言いには監理官は息を詰めた。

「…検体検査だと」

馬鹿な。それならここにいたつてできる。そんなことで済むはずがないことを、伊奈帆は自身の左目を以て知っていた。

「僕の名前で、回線を繋いでください。エーリス・ハツキネン中將に」

「やあ。界塚少尉、そこにいたか。耳が早いな」

小さい液晶画面の向こうで、エーリス・ハツキネンがわざとらしく微笑んだ。

「囚人を移送すると」

「ご執心だな。今回判明した事実を鑑みれば、それも当然か」

皮肉は聞き流し、さっさと用件を切り出すことにする。回りくどいことは嫌いだ。「目的を聞きたいのです。命にかかわることであれば、僕の持てる全ての力を使い阻

止します」

笑い声が感度の悪い通信越しにでもわかった。嫌な笑い方だ。

「勇ましいな。しかし、もう叡智の瞳はないのだぞ。八本脚の神獣もおらん。君に何ができるね、軍神君」

「なくとも」

ハッキネンは組んでいた手を解き、モニタ越しにもわかる大きなため息をついた。

「…君は頭がいいからな。はつきり言おうか。希少種のオメガだ。アルファと番わせ、子を産ませる」

「…子どもを」

背筋が怖気だった。子どもを産ませる？

「元来、オメガとは生殖に特化した種だ。それを利用するのは、自然の摂理に適っていると思うがね」

伊奈帆の両腿の横、握り込めた手が意思とは勝手にぶるぶると震えた。怒りのためでもあったし、すさまじい嫌悪感からだった。

愛する人を手放し、名前を奪われ死を奪われ、自由を奪われ、未来を奪われ、暗い地下に閉じ込められた孤独な青年。実験動物のように、檻に閉じ込め繁殖を試みると人間としての尊厳すら、それさえもうほとんど失われた彼から、何もかも根こそぎ奪い壊そうというのか。…不幸には限りというものががないことを、伊奈帆は思い知った。

「彼は人間です」

「そうとも。より強く、有能な人間を産みだす人間だ」

「…」

このモニタをたたき割ってしまいたい衝動に駆られたが、そんなことをしてもこの憎らしい上官を傷つけることはかなわない。何の意味もない行動を諦められるくらいには、伊奈帆は自分が冷静だと自覚した。

「あれのことは、忘れたまえ。軍にとって、君を失うことは大きな痛手だ」

「何のことですか」

ああ、先回りされた、と伊奈帆は奥歯を噛みしめた。そんなことまで考えるとは、

この狸親父は下衆野郎だが冷静だ。いや、冷酷。冷淡か。とにかく、人間を道具として見ることにかけては抜きん出ている。

「界塚伊奈帆少尉。プライバシーに踏み入って悪いが、君はアルファだ。オメガと惹かれ合うのはわかる。しかしな」

君をあれと番わせるつもりは、わが軍にはない。

中将ははつきりと言葉にした。伊奈帆は吐き気がして数度唾を飲みこんだ。本当に、嫌になる。全くもって邪推も甚だしいが、まさにそれを口実にしようと考えていたところだった。軍に染まって、自分も随分汚くなったものだ。

社会で認知されているアルファとオメガはそれぞれ全人口の三パーセント程度。三カ月に一度の発情期を抱えるオメガは社会的弱者と見なされている。オメガの生命、人権、社会的立場を保護するためのいくつもの法律——通称オメガ法——があり、そのことを指摘するつもりであつた。番となつたアルファとオメガは、生命保護と文化的な

生活のための様々な法的援助を全面的に受けることができる。番のいるオメガは性フェロモンの分泌がなくなるうえ、他のアルファと性交自体ができなくなる。たった一人のアルファ以外の人間にはベータと遜色ない特性になるのだ。戦争犯罪者であるスレインには人権も何もあつたものではないが、オメガ法はアルファにも適応される。スレインと自分がセックスするなんて考えたこともないし想像もできないが、自分と番になることで実験施設でモルモットのように扱われることはない、という考えがあつた。しかしそれも、ハツキネンは先回りして考え、封じにきた。思い通りにいかないものだ。

「今となつては、どうして君があれに固執するのも説明できた。あれの、命の保障はしよう。適度な運動と栄養価の高い食事。健康管理もだ。独房よりずっと快適な生活空間を与える。有能なアルファをたくさん産んでもらわなければいかん。そうだな、五十とまではいかずとも、意のままとなるアルファが三十人もいれば、世界は変わるだろう。長生きしてもらわねば。オメガの肉体は、大事に扱おう」

何の計算をしているのだ。吐き気をもよおして、伊奈帆は思わず口を手で塞いだ。

胃液の味で喉が焼ける。あまりに、あまりに人間の道を外れている。

「…彼を利用するつもりですか」

「当たり前だ。私は軍人なのだよ。することもなく、このまま独房で無為な生を過ごすよりよいと思うがね。それとも、君は自己満足のためにその地下牢へあれを引き留めるか？」

「違う」

自己満足では断じてない。この二年間、伊奈帆はスレインと面会室で向き合ってきた。確かに、初めは自分ばかりが躍起になっていたかもしれない。しかし、ひと月たち、ふた月たち、半年がすぎ、一年を迎え。二年を数えた。そうやって来る日も来る日も顔を合わせているうちに、ふとした一瞬があった。

黒い駒をつまむ指が、リズムを刻む。

チェスの戦況が苦しい時、鼻から大きく息が抜ける。

あいさつしたら生返事が聞こえた。

こつそり持ちこんだ菓子を、にやりと笑って摘み上げる手の形。

時々、口の端に現れる笑窪。

話が途切れ、ふと合う目のその色。目尻の皺。

そして、ばつが悪そうに細く引かれる口。

『界塚』と。

ぶつきらぼうな声を装い、滑らかに呼ばれる自分の名前。

友人になれたような気がしていた。

「…もう、面会は通らん。よからぬ気を起こすな。忘れたまえ。君を失いたくはない」

「…しかし」

「以上だ」

一方的に通信は切れた。伊奈帆はスリープモードに移行したモニタをしばらく睨みつけ、右手で額を押さえつけた。そのまま静かに深く呼吸を繰り返す。そうしないと、

誰かれかまわず殺してしまいそうだった。

「界塚少尉。車を回しました。どうぞ」

その場から動かず殺気立った気配を立てる伊奈帆に、監理官が近づきそう言った。その様子を遠巻きに眺める職員たちの気配を感じ、伊奈帆はより一層気持ちさがさくれ立った。

「…まだ、外部機関は到着していない。会わせてください。まだ間に合う」

「いけません。どうか」

即答だった。伊奈帆は正面切つて睨みつける。絞り出すようにしないと声が出せない。

「会わせてください」

「絶対にいけません」

監理官は目を逸らさない。彼は伊奈帆の眼光を受け止めた。そのことに、煮えたぎった頭が少し冷静になる。この壮年の下官が、伊奈帆の身を案じているのだと分かったのだ。

「お願いします。…もう、…会えないかもしれない」

腰を折って、頭を下げた。相手が息を呑んだのがわかったが、落ちてきた言葉の意味は変わらなかった。

「少尉。駄目です」

目の端に水滴が溜まった。落ちずに乾くようと目を見開く。ぼやけた床が視界を埋めた。このまま、連れて行かれるのか。そうして、もう二度とできない。会うことも、話すことも、チェスをする 것도。未来を思い描くことさえも。知らない場所で、誰も知らない間に、生きて死んでいくのか。自分の知らないうちに。

「…友だちなんだ」

両肩に、重みを感じた。監理官が肩を掴んで、伊奈帆の身を起こす。ええ、と彼は優しい声を出した。

「…ええ、わかります。お二人が楽しそうにチェスをしているのを、私たちは見ていましたから」

はっと息を詰め見つめられた目を見つめ返す。日本人らしい濃い茶色の虹彩は、温かく穏やかだった。

そうか。見ていたのか。楽しそうに見えたのか。

「私たち職員も、あの子がいなくなるのは寂しいですよ」

二年間にわたり、日の目を見ない職務に従事してきた年配の職員の顔を、伊奈帆は初めてこんなに近くで見た。誠実な眼差しで、じっと伊奈帆の隻眼を見つめている。伊奈帆は何も言えなくなってしまった。

「…」

「お帰りください」

関節に皺の目立つ手が、伊奈帆の背を押す。次の声には懇願が表れていた。

「少尉。あなたは私たちの英雄です。無茶をしてはいけません」

がやがやと物音がして、慌ただしく白衣の集団が事務室の前を通り過ぎていった。

ああ、来てしまった。どうして僕は、もつと早く手を打たなかったのか。無茶なんて、これまで何度も潜り抜けてきたじゃないか。どうして、今走りだせない。

悔しさと、取り返しがつかない思いに頭がぐらぐらして、伊奈帆はその場に膝をついて蹲った。床に、真円形の水滴の染みがいくつもできた。

六カ月が過ぎた。

伊奈帆の生活は、面会以外は以前と変わらない。

あの極秘施設から帰ってきての数日間、もしかして、自分は怒りのあまり死んでしまうのではないか、というほどに心がかき乱され冷静さを失ったものだったが、姉や友人と会話をし、仕事に忙殺されることで少なくとも体は日常に適應していった。気持ちに関係なく体は時間に急かされ適應していくのだとわかった。

しかし、日常の隙間にふと時計を見る。カレンダーを見る。そうして目を瞬く。今、

彼はどうしているだろうか。生きているはずだ。独房よりは明るくて清潔な部屋を与えられたろうか。食事は、残しているだろうな。ちゃんと食べると言ったのに。：もう、チェスなんてする相手がいらないだろう。それは僕も同じだ。

自宅のソファで物思いに耽っていると、ローテーブルの上で仕事用の携帯端末が音を立てた。非通知だが、ワンコールで出る。こちらが何か言うより先に、回線の向こうから声がした。

『界塚少尉。私です』

ノイズが混じって聞き取りにくいが、極秘施設の監理官の声に違いない。伊奈帆は知らず立ち上がっていた。体が勝手に動き出し、軍服の上着を掴み取り財布と身分証明を身に着ける。足はもう靴をひっかけていた。玄関の扉を開ける。

『どうかしましたか』

『お越しく下さい。今すぐ』

「はい」

キーをロックし、伊奈帆は走り出した。

全力疾走で極秘施設の事務室へ飛び込むと、あの監理官が駆け寄ってきた。室内には、他には誰もいない。いろいろ聞きたいことはあるが、それよりも。

「彼は？」

「少尉。囚人が戻ってきました。あの囚人です。バタバタしています。今のうちです、さあ、独房へ」

差し出されたキーを引つ掴みながら、驚いて見上げる。監理官は真剣な顔だった。彼の手が伊奈帆の背を押し、そして離れた。

「いいんですか。あなたの立場が悪くなる」

監理官はやんちゃやそうに歯を見せて笑った。今まで抱いていた印象とは正反対の、若々しい表情だ。彼は力強く頷く。

「私は、危険はないと判断しました。詳しいことは後で。さあ、お早く」

他の職員は席を外している。そうか、見て見ぬふりをしているのか。

『私たち職員も、あの子がいなくなるのは寂しいですよ』

思い出して、じん、と胸が熱くなった。伊奈帆は目の前の、おそらく父親よりも年配の下官に敬礼の姿勢をとった。彼も、完璧な敬礼を返した。

「恩に着る。ありがとう。本当に」

「グッドラック」

伊奈帆は鍵を握りしめて駆けだした。

「スレイン」

ロックを外し、独房の分厚い扉を開けて足を踏み入れる。ベッドの上で、彼が身を起こしたのが分かった。生きて動く姿を見ただけで、思わず目頭が熱くなる。最近、精神の変調に肉体が呼応する場面が多くなった。戦時中にはなかったことだ。

「…ああ、お前か。久しぶりだな」

少しがさがさしていたが、スレインの声だ。落ち着いている。手も、足もちゃんとある。いつもの囚人服。下げられたペンダント。そこまでは以前と同じ。違う部分を認め、そこで視線が留まる。首に白い包帯が巻きついていた。

「…久しぶり」

スレインは体を起こそうと肘をついたまま、一度ドアの方に視線を送った。もう一度伊奈帆に向けられた瞳は、少しだけ不安そうに揺れた。

「いいのか、お前、こんなところに来て」

伊奈帆は唇に人差し指を当てた。

「実は、内緒なんだ」

「…馬鹿だな」

スレインが少し笑った。以前とそう変わらない姿にほっとする。半年だ。別人のようになっているのではないかと思つたし、廃人のようになっていないかと怖れていた。

ベッドの端つこに腰かける。スレインは、壁に寄りかかつて膝を抱えた。ベッドの端と端で、横目で様子を伺う。伊奈帆は、独房はこんなに暗いところだったろうか、と壁のほの黒い染みを見つめた。

いつだったつけ。スレインがここに収容されて、まだ一年、半年もたっていない頃だったろうか。面会に来たら暴れて怪我して眠らせた、って聞いて、その時初めてここに入ったんだった、と伊奈帆は回想した。青白くて、動かなくて、死んでるみたいな寝顔だった。二回目の独房はやっぱり暗くて寒くて陰気臭いけど、スレインが起きて会話してくれるだけいいな、と思う。

「君がオメガだつて聞いた」

「ああ、そうらしいな」

スレインの声には、泥のような疲労がこびりついていた。もう一度、伊奈帆は視線を向ける。落ち着いた顔に見えるが、疲れ切っているようにも見えた。隈が濃い。頬がこけている。見るからに痩せた。健康管理をすつていたくせに、一層悪いじゃないか。顔を見ると、やはり首の包帯が気になった。首の後ろはガーゼを当てている

のか、少し膨らんでいる。

「僕は、アルファなんだ」

「そうらしいな」

知っていたか。半年前、移送される彼を何もできず指をくわえて見ていた自分を思い出す。

「…止められなかった」

それが何を指しているのか正確に伝わったかは怪しいが、スレインは首を振った。

「いい。君の責任ではないし、君と顔を合わせず、僕はほっとしていた」

「なんで」

「…」

スレインが、何とも言えない目で伊奈帆を見た。疲労が濃く表れた目の光には、微かな困惑と緊張があった。

そうだ。スレインはいつ、僕がアルファだと知ったんだろうか。僕は全然知らなかったし気づかなかった。今、こうして同じ空間にいても全く分からない。

「不思議なんだけど」

「…」

顔を向け、隻眼でじつと観察する。これまで、オメガに会ったことはない。会えばわかると教えられた。でも、気づかなかった。…ああ、首が気になる。ぐるぐると巻き付く、その包帯の下がどうなっているのかなんて、想像したくもないがわかってしまう。

「どうして、気づかなかったんだろうか」

スレインが意外そうに片眉を吊り上げた。よく見たら、顔には痣がいくつかできていた。口の端が切れて赤い。開くと、白い歯がのぞいた。なんでそんなところを見ているんだろう、と伊奈帆は自問してみたが答えは見つからなかった。

「…界塚。お前、どうして僕がここに戻ってきたのか知らないのか？」

「うん。慌てて車を飛ばして飛んできたところだ。ほら、ネクタイもしていない」

「…」

スレインは言葉を探すように視線をさ迷わせ、結局伏せた。

「君は、わかるのか」

「まあな。自分のことだから」

彼には、自分のことであつても分からないことはたくさんあるな、と伊奈帆は頭の端で考えた。

「教えてくれるかい」

「…」

「…」

碧の双眸が静かに伊奈帆を映している。しばらく沈黙が下りた。スレインは小さく息を吐いて、ぼそぼそと喋り出した。

「…オメガは、アルファと番になると、フェロモンの分泌がなくなるそうだな」

「君、番がいるの？」

やはり首の傷はそうなのか。気色ばんで聞き返した伊奈帆を、スレインは片手をあげて制した。

「早とちりするな。番になるには、項を噛むと」

「そうらしいね」

スレインが包帯の巻かれた首を撫でた。伊奈帆は焦燥に駆られて、その手の動きを目で追う。包帯が透けて、赤い歯形が見える気がした。

「…正確には、アルファに噛まれたら分泌が止まるんじゃない。アルファに噛まれた時だけ、その固有のアルファだけを引き付けるフェロモンに変化するそうさ。フェロモンはなくならない。普通はな。しかし分泌腺はデリケートで、ベータやオメガに噛まれたり、衝撃を受けたり、傷ついたりすると……強さにもよるが、その機能が破壊されるんだと。要するに、アルファ以外がオメガの項に歯形がつくほど噛みつくとき、フェロモンは分泌されなくなる」

「うん。…わかった。もういい。言わなくて」

スレインは呆れたように少し笑った。首の包帯を見てみると、気分が悪くて視野が狭くなってきた。伊奈帆は視界を独房の隅っこに向け、汚れが染みつき、黒々とした壁の継ぎ目を凝視する。界塚、とスレインの声が伊奈帆の名を呼んだ。

「まあ、最後まで聞け。お前は僕が火星や揚陸城で、どんな風に過ごしてきたかは知っ

ているのか」

「報告書で読んだよ」

スレインは自嘲するように笑った。痛々しい笑い方だった。今日はよく笑う。それほど自分は弱つて見えるのか、と伊奈帆は考えた。彼は右手を上げて、後ろ手で自分の首をとんとん、と叩いた。包帯が白く浮かび上がって、頭部と胴体を切り離す切り取り線のようなのだ。

「要するに、ここはとつくの昔に噛まれてる。絞められたことも、縛られたこともあつたかな。何回も血が出た。：噛んだ奴は全員ベータだったらしいな」

番うつもりもなく、戯れに噛みついた人間を、殺してやりたい、と思った。

包帯が巻かれているのは、研究施設で番を試したからだろう。おそらく、一人や二人ではない。何人もの♀に噛まれ、犯され、解剖台の上で腹の中を暴かれたに違いない。この独房から姿を消して半年だ。二回のヒートがあつた計算になる。どんな残酷な仕打ちを受けてきたのかは想像するに余りあるが、こうして伊奈帆の前で平静を保っていることは驚異的だった。スレインは暗い瞳で伊奈帆をひたと見据えた。

「わかるか。僕は、番はいないのに番を作れない。繁殖もできない。用無しのオメガなんだよ」

「…」

そこまで聞いて、伊奈帆はスレインも自身がオメガだと知ったのは、最近のことだったのではないか、と思った。

「だから、ここに戻されたんだ。…いよいよ、命の使い道がなくなった。せめて、実験材料くらいにはなれると思ったんだけどな。うまくはいかないものだ」

俯くと、首の包帯で頭と胴体が切り離されたように感じた。あの包帯の下は、血が滲んでいるのだろうか。見たこともないアルファの歯の形に。

「…予想はしていた」

会えない間、いろいろと考えた。アルファの自分が全く気づかなかったのだ。既に噛まれていたのではないか、とはすぐに思い至ったことではあるが、実際に事実として突き付けられると胸が冷え冷えとして言葉を失った。

軍は、彼の処遇をどうするつもりだろうか。

「そうか。…まあしかし、発情期は初めてだったから驚いたな。生きていたら、この先ずっとあると思うと億劫だ」

やはり、スレインは自分がオメガだと知らずに生きてきたのだろう。初めての発情が十九歳とは遅すぎるが、地球、火星、揚陸城、月、宇宙空間を渡り歩いた彼の経歴を思うと、成長期の肉体に負担が大きすぎたのだろうと思った。学校に通っていたわけでもないそうだから、見えない性別について教えられなければ気づきもしないだろう。男性との性交経験があると聞いているが、妊娠に至らなかった理由も理解できた。フェロモンの分泌がなければ、オメガは受精しない。番を失ったオメガは、二度と番を作れず、性交に体が頭痛、嘔吐などの拒否反応を示す。しかし発情期はやってくる。スレインの場合は、オメガに組み込まれた番システムそのものが番を作る前に機能を失ったため、この先番を作れず、性交も困難であり、定期的にやってくる発情期と付き合っていかなければならない。

番を作れず、生殖能力を失い、発情期を抱えたオメガ。ちぐはぐでアンバランスな肉体は、生涯精神を蝕んでいくことだろう。

「スレイン」

「同情ならいない」

彼は厳しい声音でぴしやりと言った。すごく痩せて、体中傷だらけだ。眼光は暗く鋭い。それでも、こうして話ができるだけありがたい。迷ったが、伊奈帆はにじり寄った。

「違う。…セラムさんは、アルファだろう？」

「…」

スレインが表情を失った。伊奈帆の疑問の答えは、その表情が雄弁に物語っていた。

「いや。いい」

ひどいことを聞いた。後悔の念が沸き起こる。スレインが、首を振った。

「…帰ってくれ。そして、もう来るな」

「…どういうこと」

お前がアルファなら、とスレインは遠くを見るような目で口を開いた。

「万が一にも変な気を起こしては困る。…そんな君は見たくない」

重い感じで二人は押し黙った。伊奈帆は、この独房を離れ、再び戻ってくるまで彼の身に降りかかったことを聞くとともにしに理解した。研究施設で、幾人ものアルファに犯されたのだ。誘引フェロモンなどなくとも、番でなくとも、彼に欲情し精を放ったアルファたち。項を噛んで、血を溢れさせ、痣を刻み、抵抗しない彼を思うまま蹂躪したその暴力。理不尽であり、理解しがたい行為だ。ここは安全だ、というかのようになりラックスしてベッドの上に座っているが、時々緊張したように伊奈帆に視線を送っている。理由は、彼がオメガであり、自分がアルファだからだ。

スレインは、アルファというだけで僕がそんな連中と同じだといいたいのだろうか。伊奈帆は、奥歯がぎり、と耳障りな音を立てるのを感じた。これまでは軍人と囚人という立場はありながらも友人に近い間柄だったというのに、もう一つの性別が判明した途端、二人の間の距離はとてつもなく大きく開いたようだった。このベッドの端と端は、面会室のテーブル越しよりずっと遠い。

「…発情期、辛いのに」

「辛い」

スレインが、俯いたまま自分の腕を擦るのが分かった。そこには、黄色い手の平の形の痣があった。

「楽になる方法は？」

「ない。頭が割れるほど痛い。吐いて吐いて気を失う。薬が一番ましだ」

伊奈帆は会えない間に穴が開くほど見た、虚ろな目で死んだように横たわる監視カメラの映像を思い出した。

「今日は帰る」

「ああ。さようなら。もう来るな」

独房を出る。伊奈帆は歩き出すことができず壁を殴った。

『どういふことかね。界塚伊奈帆少尉』

地球連合軍本部に直接出向いたが、ハツキネンは不在だった。アポイントメントを

とったはずだが、通じていないのか避けようとしているのか。後者の方が可能性は高い。仕方なく、専用回線を借りて伊奈帆は通信を試みている。一度目の通信から四時間後、三度目の通信で、ようやく目当ての人物が現れた。

「書面の通りです。何か、問題でも」

『問題だらけだ。まず、あれは解放できない』

「よく読んでください。移送する、という提案です」

淡々と、冷静に話すことを心掛ける。かつとなつてはいけない。今は、少なくともスレインは生きていて、会いに行くことのできる場所にいる。脳みそを引つ掻き回す過去の出来事は一度遮断する。

『同じことだ。施設の解体は考えていた。金がかかりすぎるからな。しかし、君の提案はあまりに独りよがりだろう』

ハツキネンが目を落とす書類は、スレインが極秘施設に戻されてすぐ作成したものだ。数か月を要して信頼できる昔馴染みに根回しをお願いし、つい一昨日、ハツキネンの手元に届いているはずだ。

「もつとも効率が良いと考えました」

『未成年に許可できん』

「未成年に、認可のおりていない生体デバイスを埋め込んだ人間の言葉とは思えませんね」

『少尉』

「失礼。しかし、問題があるとすれば、僕の安全面だけです。そしてそれは、心配ありません。彼は、僕に危害を加えるようなことはしません」

『どうして、そう言いけるね』

嘘ではない。しかし、時と場合によって変わる、本人たちにしか分からない事実を告げる。

「僕の方が強いからです」

伊奈帆の提案は、極秘施設を解体し、スレインの身柄を監督官とともに、セキュリティの高い住居へ移送するというものだ。監督官は自分だ。適任者は他にいないというのは、彼を討ち取った本人の申し出なのだから、ハツキネンも反論できないだろう。

『…なるほど。では、君とあれが手を組んで、地球軍に不利益を与える可能性は？』
「彼は生殖能力を失ったオメガです。健康状態は不安定ですし、僕が彼に従属する理由はありません。また、僕は地球連合軍の軍人です。その心配は杞憂です」

『君の目的はなんだ？』

伊奈帆は瞬きせず、モニタの向こうの眼鏡の奥を射抜きはつきりと言う。真つ向勝負でいくことにした。

「死なせたくない。それだけです」

『…なるほど。界塚少尉』

「はい」

ハッキネンが、眼鏡を外し背もたれに深く体重を預けた。大きく吐かれた息と眉間をもむ仕草が、年齢を感じさせた。

『こんな私でも、情はあるのだよ。君のことを心配している。オメガは危険だ。フェロモンでアルファを虜にする。有能なアルファを意のままに操ることができるのだ』
「彼は、その機能を失っています」

この先は堂々巡りだ。押して押して、押すしかない。もう後悔はしない。

『そうだったな。しかし、それにも関わらず、あてがったアルファは全て発情し性交に及んだと聞いている。万が一、ということもないか?』

「検査結果と事実は変わりません。損なわれたものは、もう戻らない」

ハツキネンが片目を大きく開いた。

『君が言うと言得力があるな』

「彼には時間がありません。このまま手を打たなければ、この先：三月ともたず死にます。番を持たないオメガの発情は命も心も削る」

『どういう手が打てるね?』

書いてあることを確認しに来る。どこまで本気が確かめたいのだろう。全部本音だ。全部さらけ出して、もう何もない。

「今の彼はストレスの極値にいます。せめて、人間らしい生活を提供することが回復に必須の条件です。監視員はアルファの僕が務めれば、優位は保てるでしょう。極秘施設に戻ってからの五か月で、体重は十二キロ落ちています。本当に死にますよ」

『発情期が訪れた場合、どう対処する？』

「できることを」

『性交には拒絶反応を示すと知っているかね』

「報告書は読みました」

『君にできることはない』

「そうでしょうか」

『番にはなれん』

「知っています」

伊奈帆は、モニタを見つめる。この老人は冷酷で冷淡だが、まるきり計算だけで生きていくのではないのだ。

『仮初の自由だ。監視下に置かれることには変わりない。当然、外出はできない』

「知っています。しかしそれは、中将のかつての提案と比較して突飛でもありません。上層部には利益ばかりに思えますが」

しばらく、言葉はなかった。モニタの向こうで、ハツキネンが眼鏡をかけて、テ-

ブルの上で両手を組んだ。

『…わかった。曲がりなりにも、あれは火星の女王からの預かりもの。衰弱死は本意ではない。善処しよう。君には、借りがあることだしな』

「お願いします」

「やあ。調子はどう」

「…お前か。別に、どうも」

職員に肩を支えられて面会室へやってきたスレインは、伊奈帆の挨拶に強がりをつた。職員が離れると、支えを失った体は糸の外れたマリオネットみたいに、椅子の上へぐしゃりと体を落とした。あちらこちらを向いた手足は骨の形が分かるくらいだ。昨日まで発情期だったと聞いている。この一週間は、面会の許可がどうしても下りなかった。テーブルの向こうのやつれてぼうつとした顔は、蛍光灯の光を病的に反射し

ていた。肌は乾いて、あちこちに引つ搔いたような細かい傷ができています。床の上に投げ出された踝のあまりの細さに、伊奈帆は一瞬息が止まった。

「やつと面会の許可が下りた。痩せたね」

「…」

顔色は土色で、具合も悪そうだ。ぎょろりと碧の目が動き、伊奈帆を捉える。こんなに目が大きかったか、と思うのは顔の肉も削げて目が落ち窪んでいるからだ。初めて発情期を迎えてから、これで六回目。その度ひどく憔悴し、体はみるみる痩せていた。薬の副作用がきついのだろう。しかし、薬なしではヒートを越えられないと聞いた。番がないオメガの発情期は悲惨だ。番以外のアルファとの性交には拒絶反応があるため、求めても満たされることはなく、苦痛に等しい快樂の逃がし場所がないのだ。スレインに投与されている薬はオメガが一般的に使用する分量の十六倍と聞いた。体がもつわけがない。

「時間があまりないから、用件を先に言おう」

「ようけん？」

舌足らずな口調に、表情に出さないと決めていたのに眉に皺が寄る。本当に、ぎりぎりだ。

「この極秘施設は解体することになった」

「そうか」

スレインの歯が見えた。笑ったのかもしれない。

「君の身柄は、軍が用意した住居で、監督員が預かる」

「…何だって？」

おそらく、処刑の日取りが決まったと早合点したらしいスレインが身を起こして言った。口調がはつきりとして、伊奈帆は少しほっとした。

「目的は、経費削減と君の存命だ。このまま痩せ細って死んでいくのは軍にも都合が悪い」

「監督員？ 初めて聞いたぞ」

「君のためにできた役職だよ。務めるの僕だから。来週と同じ時間に迎えに来る」
「はあ？」

「何か、質問はある？」

「どういふことだ？ お前が、僕と、一緒に住むって？ 馬鹿じゃないのか」

「馬鹿で結構。細かい規約は置いておくから読んで」

伊奈帆は立ち上がる。本当はもっと話をしたいが、これ以上彼の体力を消耗させた
くはない。スレインは中腰になって、机の上の書類の文字に目を走らせている。紙の
端に添えられた手の指を横目で見やり、伊奈帆はくると背を向けた。

「おい、界塚！」

「来週まで、生きててよ」

「おい！」

面会室の扉を背にして、歩き出す。あんなに大きな声を聞いたのは久しぶりだ。伊
奈帆は足取りが軽くなったのを感じた。ちよつと、元気になったみたいだ。お互いに。

それが、十か月前のことだ。

小うるさい電子音に、無理やり現実へ引き戻される。手探りでスマートフォンを探り、アラームの停止ボタンを押す。仕事の疲れが溜まっているのか、目覚めの気分はあまりよくない。がしがしと側頭部を掻いてあくびをすると、斜め下方から小さく唸る声が聞こえた。

「おはよう」

「…ああ、おはよう」

布団の中から返事が聞こえた。起きる気配はない。朝に強い彼には珍しい、と気づいて布団の中に手を伸ばし、手探りで額を触る。寝起きにしても、いつもより体温が高い。

「もしかしてヒート？」

布団から顔が出てきた。目がしょぼしょぼしている。顔色は紙のように白い。

「…まだ。でも、もうすぐって感じがする」

「わかった。寝ていいよ」

掛け布団から足を抜き出し、包まったままの彼を跨ぎ越す。箆笥の引き出しを開ける。

「界塚……」

服を着ていると、遠慮がちな声がかかった。伊奈帆は顔だけで振り向く。スレインは布団から顔を出していた。ぼんやりした顔だ。

「何か食べられる？」

「……あまり」

「味噌汁は？」

「それなら……」

「オーケー」

着替えが終わり、脱いだ寝間着を片手で抱える。カーテンを開けて、少しでも窓を開けて風を入れる。もう一度彼の額に手を当てて、伊奈帆は寝室をあとにした。

「食べたほうがいい。全部じゃなくていいから」

ダイニングテーブルに向かい合って食事を進めつつ、伊奈帆は声をかけた。食欲がわかず手が付けられないように、スレインは味噌汁の椀を両手で挟んだままぼうつと座っている。

椀に添えられた手の指と、手の甲と、手首と、伸びる腕をなんとなしに眺める。伊奈帆よりはずっと細いが、数か月前とは比べ物にならないくらい健康的になった。それだけでも、こうして一緒に暮らすことができて良かったと思う。普段から食が細い彼だけど、これならまあ、一週間くらい適当に済ませてでも死ぬことはないだろう。自分に注ぐついでに、スレインの湯呑にも茶を注いでやる。

「ありがとう」

「定時に帰るよ」

ごくごく、と茶を飲み干して伊奈帆は立ち上がった。このやりとりは、これで三回目だ。すなわち、新しい監視体制に入り迎えるヒートの数と整合する。

二人は番ではないので、オメガ法は適用されない。休暇はとれないし、そもそも彼

の存在は最高機密だ。だからこれからの一週間は、伊奈帆はほとんど眠ることもできない。スレインはそれをずっと気にしていて、気の毒なほど身を小さくして項垂れていた。具合も悪いのだろうが、申し訳なさが先に立つような声音で返答があった。

「…無理しなくていい」

伊奈帆としては、頼ってくれると嬉しいし、多少面倒で体力的にきついとしても、受けて立とうという気構えでいる。元来が世話焼きなので、彼の世話は苦ではない。そもそも、伊奈帆はヒートに対してそれほど特別な感情を持っているわけではない。生理現象なのだから、どうこう言っても始まらない、というスタンスだ。食事や睡眠と同じだ。生きていくための作業の一つなのだ。誰かの助けで楽になるなら、一人より二人のほうがずっといい。

「辛かったら、薬を飲むんだよ」

「でも」

洗面所のラックには、抑制剤が常備してある。監獄での副作用を思い出してか、彼はあまり飲みたがらない。伊奈帆も、どちらかというと飲まない方がよいと思う。

「確かにきつい薬だけれど、死んだりしない。飲まずに苦しむよりずっといい」

「…わかった」

うん、と頷いて伊奈帆は立ち上がった。そろそろ出勤の時間だ。スレインを一人残していくのは心配ではあるが、そうも言っていられない。椅子に掛けてあった上着に袖を通す。

「じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい」

普通に行ってらっしゃいと言えるようになったんだなあ、と伊奈帆はしみじみ思つてにんまりした。時は過ぎ、人は変わるものだ。

「生きててよ」

「大丈夫だ」

スレインがぬるくなつた茶を飲む様子を目の端で捕らえ、伊奈帆はじゃあ、と玄関へ向かった。

十二時間後、伊奈帆は自宅の鍵を鍵穴に差し込みくると回した。どういうわけで、こんな前時代的な鍵を用意したのか。想像はいくつかあるが現実が変わるわけでもない、そのままドアを開ける。光が漏れ出る。室内は明るい。

「ただいま」

「…おかえり」

玄関先でスレインが膝を抱えて蹲っていた。腕の中にある顔が、少し持ち上がって、伊奈帆を見てまた下がった。気分が悪そうだ。嘔吐くように背中が上下した。

伊奈帆は玄関をロックして、慌てて膝をつき背をさする。背中が熱くて汗ばんでいる。顔が腕の間から伊奈帆に向けられた。熱に浮かされた瞳に水分で膜が張る。伊奈帆はごくり、と唾を飲みこんだ。

「大丈夫？」

「…界塚」

口が何かを言おうと数度開閉したが、何も言わずスレインはそのまま俯いてしまった。息が荒い。無理やり顎を持ち上げて、口で口を塞ぐ。生温かい唾液が顎を伝った。そのまましばらく呼吸を交換していると、少し落ち着いたようだ。肩を支えて、顔をのぞき込む。とろんとした目で、物欲しそうに小さく口を開いていた。紅潮した頬がびくびく動く。その頬を撫でる。やはり少し熱い。金の睫毛が水を含んで束になつていた。喉が鳴り、喉仏が上下する様子が網膜にスローモーションのように鮮明に網膜へ焼き付いた。

「立てる？」

「…無理」

スレインは脱力して息も絶え絶えだ。薬を飲んだようで、反応が鈍い。ふらつくのか、頭を伊奈帆の肩に押し付けてきた。白い項が近くにある。複雑な心境で、しばらくその白さを眺める。ここを噛んだことはもちろん、舐めたことも触ったことも一度もない。一度目を閉じて、後ろ向きな思考を追い払った。

「じゃあ、こうしよう」

膝の裏に腕を差し込み、ぐつと持ち上げた。伊奈帆の腕の中で、スレインは身を固く強張らせている。両手が、自身の胸のあたり、ペンダントのあたりを引っ搔いて握りしめた。よいしょ、と伊奈帆は上り口を跨ぎ、室内へ進む。

「お腹すいてない？」

スレインは黙って首を振った。

「シャワーは？」

これも、首を振った。何かを言ったようだが、小さくて聞き取れなかった。

「じゃあ、すぐしよう」

項を噛まれたオメガは、番を作ることができない。たとえその後運命のアルファと出会ったとしても、番になることはできない。オメガのヒートにアルファは誘引されない。子を成すこともない。それでも、発情期だけは定期的にやってくる。番ではないものと性交することは、オメガにとってひどい苦痛を伴う。眩暈、吐き気、頭痛。それでも、三ヶ月に一度の周期でそれはやってくる。

こうして同居するようになり、これが三回目。一般的な発情期より間隔が短い。前

の二回は嵐のように過ぎ去った。嘔吐する彼の背中を擦り、酸素を求めて喘ぐ口に呼吸を吹き込んだ。溺れて死に向かうかのような性交だったが、少なくとも彼の手は自分の背中に回されたので、そう悪いことばかりではない。

「…すまないな。お前、疲れてるのに」

「あのね、我慢できないのはお互い様だから。それに、僕は結構楽しいよ」

洗面所に寄り道して、タオルを数枚つかみ取る。スレインの腹の上にかぶせて寝室へ足を速める。スレインの分泌腺は機能しないのでフェロモンに誘引されたわけではないのだが、体温を感じ吐息を聞いていると、どうにもそういう気分になってしまう。キスしたいし、触りたい。髪を撫でて、骨を辿って、肌の傷跡をじっくりなぞりたい。思うままに体をつなげて奥まで感じたい。

いつの間にか、スレインは伊奈帆にとってそういう対象になってしまった。

普段の二人暮らしは穏やかだ。まるで友人同士のようでもあるし、兄弟のようでもあるし、家族と言っていいかもしれない。つかず離れず、居心地のよい空間で過ごす時間は心地いい。ヒート以外で体に触ることは、あまりない。同じベッドで寝ていて

も、体は必要以上に触らない。時々、背中や肩が触れ合うくらいだ。それが、きつと安心できる距離なのだろう。お互いに。起きて顔を見合わせると笑うし、ご飯を食べるときにくだらないうんちを言い合ったりする。伊奈帆が帰ってくると、明るい部屋でちよつと味付けの微妙な料理がコンロの上で器によそわれるのを待っている。おかえり、という声。躊躇いがちな笑顔。何かのついでに、呼ばれる名前。

こんなに好きになるんだったら、番になればよかった。もつと前に出会って、項を噛んでしまいたかった。肉体の拒絶に苛まれることなく、繋がることであればよかった。しがたない想像だ。

でも、今だってそう悪くはない。

熱い額に音を立てて口づけた。スレインの体がびくりと震える。

「…あ」

「好きだよ」

好きな人に求められるというのは、それがフェロモンとか、そんなのではなく、苦しみを伴いながらも縊られるというのは、悪くない。今日もスレインは頭痛と過呼吸

に苦しむだろうし、何度も吐くだろう。しばらくは食べることもできず、また体重が落ちるだろう。どうしようもない感覚に翻弄されて、わけもわからずのたうつだろう。それを見るのは辛い。しかしそれでも、その手が伸ばされたところに自分がいて、その手を握ったら握り返され、ほんの少しだけ見つめた彼の目が笑う。今のところ、それで十分満足だ。

十年後

「じゃあ、後は頼むよ」

私用の電話で席を外していた少佐は、戻るなりデスクを片付け始めた。ものの十数秒でおわり、デスクの下からバッグを取り出し持ち上げる。

「え、少佐、お帰りですか」

自分はこの上官と仕事でチームを組むようになり、二か月ほどになる。先日の歓迎

会で、この上司が見た目よりずっと年上で、あの伝説の軍神だと知ったときの驚きは筆舌に尽くしがたい。それまで、割とフランクに要するに、舐めた口を聞いてしまっていたような気がして、それ以来背筋を正し、できるだけ真面目に仕事に取り掛かるよう心掛けているのだった。

うん、と頷く上官はいつも通りの無表情に見えるが、どこかそわそわと落ち着かない様子だ。口元が少し綻んでいる。普段は仏頂面を絵にかいたような上官だが、今は早く帰りたい、そうはつきり顔に書いてある。

「何かありましたか」

「いや。家族がちよつと」

家族。少佐の口からは初めて聞く単語だ。そりゃあそうだ。私生活くらい、誰にだつてあるが…。

「なんすか。病気？ 事故？ ですか？」

「…そんなとこ。三日休むから、何かあったら適当によろしく」

「ええ！」

そんな、少佐がいなかったらこの仕事の山をどうすれば。…自分のノルマではあるのだが。

「連絡しないで。じゃあね」

風のように去る隻眼の将校を、茫然と見送った。

「界塚少佐、相変わらず行動が速いな。まあ、がんばれ」

「独り立ちするいい機会よ。いつまでも頼ってちゃ、いけない、いけない。」

わらわらと、他のデスクの島から同僚たちが集まってきた。若いのから年寄りまで、
どいつもこいつもご愁傷様、と顔に書いてある。

「…ええと、何？ どうして少佐は突然帰るんすか」

「ヒートだろう」

「へ？ ヒー…？」

「一緒に暮らしている人が、オメガだって話だよ」

「ええ!？」

「少佐はアルファ」

「まじすか。でも、確かに…」

有能。頭脳明晰。そもそも先の戦争の大功労者じゃないか、と一人で納得する。

「アルファとオメガの恋か。運命的よね」

「でも、オメガ法があるから、有給無制限で一週間取れるんでしょう？ 休暇。なん
で三日？」

あまり知らないが、様々な特権を行使できると試験勉強で詰め込んだ記憶を辿る。
羨ましいと思ったものだ。

「ご結婚はされてないらしいのよ」

「へえ」

「少佐がここに配属された時にはもう噂になってたぞ。界塚少佐はまだ十代だったが、
すごい美人と付き合ってるって。その時は、確かまだ少尉だったか」

「十代…」

「噂では、十五年前の戦争で出会った火星の亡命者、とか」

「それが、火星のお貴族様だったって」

「火星の工作員だって聞いたぞ」

「いや、中東の姫君だって」

「あら。地球のパイロットだって話よ」

「違うって、火星だよ。軌道騎士」

「どれが本当だ？」

「生ける伝説だもの。少佐は」

戦後育ちの自分は、どうもこの会話の熱さについていけない。どうしてみんな、そんな目をきらきらさせてるんだろうか。

「軍神界塚伊奈帆。火星のプリンセスとのロマンスは有名だぞ」

「アセイラム女王は、火星の王子様と結婚しちゃったものねえ」

「身分違いの恋…」

「ほろ苦い初恋の後、運命のオメガと出会ったのね。素敵」

「結婚しないのは、なんでだ？ 年がすごく離れてるとか」

「時代錯誤」

「相手は同性とか？」

「それも時代錯誤。大体、今の社会で婚姻に性別は関係ないでしょう」

「わけありかな。さっきの、火星人説は信憑性高い。プライベートがわからん人だから。少佐は」

「さあなあ。しかしま、年の差つてのはあるかもな。年上美人って話だぞ」

「どこ情報？」

「はいはい。俺、前に酒の席で聞いたことあるよ。年上かは知らんが」

「どうなの？」

「バタ惚れだったぞ。寝顔と、笑顔がかわいいって」

「きやあ」

「あらあら、ごちそうさま」

「少佐がそんなこと言うなんて、想像もつかないな……」

「ギャップがいいわよね」

「うん。普段クールで仕事のできる少佐が、家ではでれでれなのね」

「性格は？」

「おつちよこちよいで、しょうゆとめんつゆを間違えたって言ってたぞ。……これ、十年くらい前の話だけど」

「その二つなら、そんなに致命的な間違いではないな。砂糖と塩とか、ベタだけど」
「でも、かなり深刻そうに呟いてたぞ。あれは弁当の卵焼きの味付けだったが……」

「美人でちよつと抜けてて、無防備な寝顔とかわいい笑顔か。少佐の性格からして、年上説は説得力あるな」

「写真とかないかな」

「そのへん、ガードが固いよな」

「同棲してもう十年くらいよね？ お子さんは？」

「さあ、いないらしい。詳しくは知らないけど」

「馬鹿ね、そのための休暇でしょ。少佐ももう、…いくつだっけ」

「三十だよ。若く見えるけど」

「そうかあ、少佐も、もうそんなかあ。俺らも年を取るはずだ」

「でもでも、あのクールな少佐が毎度、この時ばかりはうきうきなんだもん。かわいいわよね」

一番年上の同僚が突然、自分の背中を叩いた。椅子が勢いよく前へ進み、机にボディーパーローを食らう。痛い。

「まあ、少佐がもどってくるまでがんばれ。へますんなよ」

「…ええ、まあ」

「絶対に電話しちやだめよ。メールもダメ。自分で何とかしなさい。そもそもあなたの仕事でしょ」

「はい…」

アルドノア歴十二年。地球連合軍管轄サイバネティックス研究所は、そこそこ平和だ。

「ただいま」

伊奈帆が玄関の扉を開けると、スレインが壁に背をもたれかけさせて座り込んでいた。抱えた膝の間に、伸びた金の髪が垂れている。声に反応して頭が持ち上がり、上気した顔が髪の間から覗いた。近くに膝をつき髪をかき上げてやると、気持ちよさそうに瞼が閉じた。睫毛の一本一本が肌に落とす影に舌を這わせる。少し濡れていた。味はしょっぱい。

「……伊奈帆」

壁に手について少し開いた唇に口づける。口の中は熱かった。差し込んだ舌に舌が絡まり、深いところへ誘われる。気がつくと、首の後ろに彼の手が回っていた。こんなに積極的なのは珍しいな、と嬉しくなる。後頭部を引き寄せて、喉の奥まで舌を進める。布が触れ合った胸から、早い鼓動が伝わった。頭を支える手で髪を数度梳き、

そのまま骨をなぞるように下ろしていく。耳の後ろから、首の後ろ。項を紙一枚隔てるくらいそつとなでると、不思議な感じがした。反発していた磁石の曲をくると回し、引き寄せ合う一瞬のような感覚。なんだろう。まあいいか。そのまま背骨の継ぎ目の形を一つ一つ確かめ、くびれた腰を引き寄せる。脇腹を擦ると、重ねた唇から熱い吐息が漏れた。舌を引き抜き口を離すと、混ざり合った唾液が顎を伝い、服に染みを作った。うつとりしたように数度瞬きをして、スレインは伊奈帆の肩口に額をぐりぐりと押し付けてくる。壁に寄りかかっていたスレインの体を手前へ引き、少し向きを変えて両手で背を抱いた。小刻みに背中が震えて、密着した腰が少し揺れた。

…どうしよう。なんだかすぐくかわいい。伊奈帆はどうにも体が疼いて、気持ち急いでいることに気がついた。指を絡めて握ると、握り返される。もう一方の手で背中を支えて、床に倒す。覆いかぶさるように顔を近づけると、スレインは目を細めた。鼻先を吸うと、小さく声があがった。

「ん…」

突き出た唇に吸い付く。音を立てて何回もそれを繰り返していると、息が上がって

きた。キスの合間に、瞳を盗み見る。時々合わされ、その度微かに細められる碧は、水を張って綺麗だった。

「…大丈夫？」

「うん…大丈夫」

大丈夫じゃなかったらこちらが大丈夫ではないかな、と伊奈帆は自分も頭が沸騰しているようだと思の奥で笑った。我慢はできそうにないし、する必要もないか。ここには二人しかいないんだから。

「…ね、いい？　ここで」

スレインがこくりと頷いた。肩口まで伸びた髪が、床に散ってきれいだった。首筋に軽くキスを落とすと、凹凸のある喉がしなって仰け反った。びく、と肩が跳ねる。床の上に放り出された手首を握って押し付ける。どくどくという音が手のひらを伝えた。

「ああ…あつ」

ぶわり、となにか濃度の高い空気に包まれた感覚があった。匂いがする。柑橘系の

果実のような、瑞々しく鼻を抜けるような香りだ。こんなのは初めてだ。スレインの首から鎖骨、大きく開いた襟ぐりを引つ張つて、肌に舌を這わせる。さらりと甘い味がする。服の上から乳首をぐりぐりと押すと、甘い悲鳴と一緒に漂う香りが一層濃くなった。吸い込むと、酩酊するような感じで、心地よい。

「いいにおい…何かつけた？」

「んっ、何も…あつ…！」

服をまくり上げると、見慣れた肌がやけに艶めかしい光沢をもって現れた。胸の突起や臍のあたりが赤く色づいて、すべすべとした肌は触るとしっとり吸いついてくる。すぐく気持ちいい。何度も肌の上で手の平を往復させていると、スレインの声が大きくなってきた。それと一緒に、漂う香りが変化していく。ああ、そうか。

忘れていたことを思い出した。そう言えば、学校で習った。教科書に書いてあった。確か、フェロモンっていうのはこういう匂いがするんじゃないかったか。花とか、果物とか、そういう匂い。

「…すごく甘い。果物みたいなにおいがする」

赤く尖った飾りを口に含むと、蜜のような甘くとろりとした感覚があつた。実際に液体が漏れ出ているわけではないのだが、そういう風を感じる。ころころと舌で転がすと、スレインの背中が張り詰めて甘い嬌声があがった。押し倒された体勢のまま、伊奈帆の足に太ももをすり寄せてくる。本当に今日は積極的だ。

「そ、う…かな…ああっ」

フローリングの上でゆらゆらと揺れる腰を両手でつかみ、撫で上げる。がくがくと膝が笑った。甘い吐息を食べてやる。口内は熱くて、熟れていた。二人で何度もセックスしたけど、こんなに気持ちいいのは初めてかもしれない、と伊奈帆は思った。

「…あのさ」

「は、あ…なに…?」

スレインが涙目で伊奈帆を睨んだ。早く次に進みたいのだろうけれど、ちよつと待つてほしい。だって、もったいない。だってすごく素敵なんだ。それに。

「気持ちいい?」

「うん…?」

大事なことだ。もう一度、少しゆっくり声に出して聞く。

「ねえ、気持ちいい？」

ぱちぱちと二回瞬きをした後、伊奈帆の質問の意図を了解した、というようにスレインの瞳が大きく見開かれ、瞼がゆつくりと閉じ、そして柔らかく開いた。細められた目と下がった眉尻は、年齢よりずっとあどけなく愛らしい。伊奈帆が大好きな顔だ。

「…ああ、すごく気持ちいい。…全然苦しくない。大丈夫」

「…そっか」

十年だ。二人で越えてきたヒートの数は三十七回。最初の三年はお互い、生死の境を行き来するようだった。次第に慣れて、五年くらいしたら吐くのはなくなった。七年目で絶頂があった。八年目には、いくとき名前を呼んでくれた。九年目には、もう薬はいらなくなった。

そして十年目。ああ、今度は澄んだ花の香りがする。薔薇だろうか。濃厚で、空気の色がついているみたいだ。口に含んだ息も肌もすごく甘い。目も、髪も、肌も、全部すごく綺麗に見える。食べてしまいたいくらい。早く一緒になりたい。きつと、すご

く幸せな瞬間があるという確信があった。

一瞬。薄暗く寒い独房で見た、首を覆う白い包帯が頭をよぎった。固いベッドの端と端に座って、深刻そうに言葉を交わして。まだ、体に触れたことも、手を握ったことさえなかった。薄っぺらい囚人服に包まれた傷だらけの体からは、痛々しいというだけの感情しか持ち得なかった。今では、随分昔のことだ。

ちよつと泣きそうだった。

「…伊奈帆、…その、早く…」

手を止めた伊奈帆に、スレインは恥ずかしそうに言った。節くれだった華奢な指が伊奈帆の手を握った。カタフラクト越しにこの手を掴んでから、もう十二年だ。

生きている。僕も。彼も。

スレインの手を両手で戴くように持ち上げて、手の甲にキスをした。そこから、また美しい香りが漂った。甘い木の香り。雪の降る森のようだ、と伊奈帆は書面でしか知らないスレインの生まれ故郷を想った。

「ああ、ごめん。…やっぱ、ちゃんとベッドに行こう」

「うわ」

床についた背中と膝裏に腕を滑り込ませて、一気に持ち上げた。慌てて首にしがみつく白い腕がやけにおいしそうでぺろりと舐めると、くぐもった声が耳に甘い。へへ、と声を漏らして伊奈帆は笑う。

「久しぶりだな、これ」

「…恥ずかしいやつ」

行儀悪く足だけで靴を脱ぎ捨て、大股で廊下を歩く。白い壁はどこどころ褪せて、フロアリングは傷がついたりへこんだりしている。そういえば、雨続きで布団を干していなかったな。乾燥機くらいかけておけばよかった。このところエアコンの調子が悪い。今日は寒くなければいいけれど。

軍の管理するこの住まいも、すっかり二人のものだ。鳥籠のつもりで与えたらしい白く無機質だった住居はどこどこ古びて、今ではとても居心地が良い。

籠でもなんでも、そこに誰かがいれば生きていけるものだ。

「スレイン」

「…何？」

「好きだよ」

「…うん。ありがとう」

ベッドの上に倒れ込んで、唇を重ねる。甘酸っぱくて少し苦い、初夏の爽やかな風が通り抜けるような香り。世界で一番、幸せな味がした。

どこからか、黄色い香りがする。

「いいにおい」

喉仏のあたりに鼻を埋めて、手は脇腹のあたりを撫でさすりながら、伊奈帆が言った。熱い息が喉にかかつて、ぞくぞくと快感が背筋を駆けのぼる。どうしたんだろう。今日はなんだかおかしい。触られたところが温かくて、ずっと触れていてほしい。あと、汗とか体液じゃない、なんだか不思議な香りがする。香水ではないだろうけれど、そう、果物。果物の皮のような…。

「蜜柑みたいな」

そうだろうか。柑橘系だとは思うけれど、もつとすつきりとして、土や木々の匂いが混ざっている気がする。

いつの間にか、服の下を撫でる伊奈帆の手が腰骨をなぞっていた。上げて、と言われて素直に腰を上げると、下着ごと下衣を足から引き抜かれる。じくじくと前から後ろからも熱いものが溢れてきて、足の間はそこら中濡れているに違いない。今更だけれど恥ずかしくなつて、スレインはぎゅつと目をつぶった。しばらく、衣擦れの音

と床に何か落ちる音がした。薄く目を開けると、自分の上で伊奈帆が服を脱いでいるのだと分かつて今度はもつと恥ずかしくなってしまった。目のやり場に困って壁の模様を数えそのままじっとしていたら、伊奈帆の手がもう首のところまでたくし上げていたシャツを引っ張った。

「脱がすよ。手、上げて」

ホールドアップ。こんな時に変な話だと思つて、少しおかしくなった。シャツは首から抜き取られ、床に放り投げられた。二人分の衣服は、床の上でミルフィーユみたいに積み重なっているだろう。

「ああ、すごくいいにおい」

仰向けになっているスレインに、伊奈帆が屈んでキスをした。その時、確かに、何か香った。舌の間で混ざり合った唾液を飲み込むと、甘酸っぱいような、ちよつと苦い味がした。唇を触れ合わせたまま、お互いの瞳を映し合う。伊奈帆が舌を出して少し笑った。

「今、レモンの味がした」

ああ、レモン畑。スレインはつられて笑い、首を伸ばしてその舌に吸い付いた。忘れていた記憶が呼び起された。幼い頃、シチリアで歩いた、レモン畑の香りだ。土と、草と、若い果実の香り。揺らす風と吹き抜けるその先の青い空。地球の美しさを切り取ったような風景。ああ。この男に、よく似あうな、とスレインは思った。

「ん…、……は、………っあ」

指でゆっくりと解されて、中の方がもつともつとと疼く。腰が勝手に浮き上がるのを、伊奈帆の手が支えた。ちがう、そうじゃない。そんなの早く抜いて、入れてほしい。

「…辛くない？」

伊奈帆の手が止まった。乱れた呼吸が収まっていく。ああ、じれったい。もつと性急でいいのに。いつもこの男は、いちいち聞いて、その度熱が滞留する。要するに、ムードとか、そう、情緒がない。

そこでふと、そんなことを考えるなんて自分も呑気になったものだ、とスレインの鼻から息が漏れた。安らかな気持ちになって、優しい声が出た。

「…気持ち、いい。夢みたいだ」

不思議だ。これまで、こんな感覚になったことはなかった。

初めてこの部屋でヒートを迎えた日のことを思い出す。独房だって、実験室だって、我慢できないほど辛かった。ここでも、やつぱりすごく苦しくて、気がおかしくなりそうだった。

せめて抑制剤で楽になれば、じつとしていれば過ぎていくのに。与えられた分を飲んでも一向に楽にならなかった。体が意思とは関係なく疼いて反応を繰り返し、頭は割れるようで腹はひどく熱い。

夜だった。伊奈帆は帰っていた。食事は喉を通らなかったが、まだ、その時は堪えられた。でも時間が一秒一秒降り積もる間に、体がいうことを聞かなくなつて。風呂場で、じつと水を浴びていた。意識は朦朧として気を失いそうだったが、体は熱くて

どうしようもなかった。

このまま死んでしまえないだろうか。

そんなことをぼんやり考えていると、浴室のドアが勢いよく開いた。飛び込んできた伊奈帆は、冷水で濡れるのもかまわずスレインの頭を肩を支えた。温かい人の手が、体に触れた。シャワーの水は出たままだ。自分のどこにそんな力があつたのかわからないが、その温かい喉に掴みかかった。なぜだろう。殺意があつたのかもしれない。それか、昔のことを思い出したのかもしれない。氷のような水しぶきの中で、スレインは伊奈帆の喉笛に噛みついて、血を舐めて、服を剥ぎ取り腹の上に跨った。伊奈帆が何度か制止の言葉をかけたような気がするが、よく覚えていない。肌を舐めて、性器をしやぶった。時々、性交の予感を体が感じて嘔吐した。体がばらばらになるように関節が痛んだ。頭の中を素手でかき回されているような頭痛がした。それでも、脳が穴を埋めるものを欲して体を突き動かす。アルファを求めて、後孔からじくじくと愛液が滴る。何度も性器を擦りつけ、孔に手であてがった。でも何も起らなくて、そのうち伊奈帆がスレインの体を押してシャワーの水を止めた。疲れ切って何も言えな

いまま、スレインは伊奈帆が立ち上がり浴室を出たところで気を失った。

目が覚めると、ベッドで寝ていた。カーテンは開いている。外は明るい。断続的な倦怠感と苦痛はあったが、オメガとしての衝動はかなり治まっていた。喉の渴きを覚えて身を起こす。服を着ている。

昨夜の記憶が徐々に戻ってきて、頭を抱える。ヒートのせいではない頭痛がした。あいつ、どういうつもりなんだ。

おそろおそろりビングに足を踏み入れると、味噌と醤油のいい匂いがした。洗濯機のドラムが回転する音が、何枚かの壁ごしに聞こえる。界塚はどこにもいない。仕事に行ったのだろう。

少しだけほつとして室内を見渡す。ダイニングテーブルには、耐熱容器に入ったライスポールと味噌汁、卵焼きがラップで包まれ置いてあった。それぞれのラップの上に、付箋紙が貼ってある。目を擦り、顔を近づけると「500 W 1 m」 「45 s」 「30 s」という文字が読み取れた。

馬鹿じゃないのか。

シンクを見ると、洗いざらしの茶碗と椀、箸が食器籠に置かれたままだった。スレインはもう一度テーブルの上に用意された食事を目を落とす。

あいつ、あれだけの出来事の後に僕を部屋に運んで、服を着せて、掃除をして、洗濯して、食事を用意して。自分はそれを食べて、仕事に行ったのか。こんなメモ書きを残して。

目が急にぼやけて見えなくなった。目を擦ると、手が濡れた。付箋紙をつまむ。少し角ばった、右下がりの文字。その文字が滲んで、黒いインクが広がった。どうしてもか涙が次々出た。

本当に、馬鹿じゃないのか。こんな。どうして。

立っていられなくて、椅子を引いて座った。ああ、面会室の椅子より、ずっと座り心地がいい。テーブルも椅子も、木の匂いがする。サララップをペリペリと取る。味噌の香りを吸い込んだ。一口すすする。はじめて、おいしいと感じた。

電子レンジで温めることはしなかったが、彼が残した食べ物には不思議と全て腹の中

に収まった。ちゃんと味がして、毎日何かを摂取しているのに、久しぶりに食事をしたように感じた。

不思議と、日中は叫び出すほどの苦しみはなかった。食事の後、薬を少し多めに飲んだからかもしれない。それに、体力が落ちているからだ。体力が回復したら、きつとまた暴れ出すだろう。

その夜帰ってきた伊奈帆は、今日はがんばるから、と少し隈の浮き出た顔で照れくさそうに笑ったのだった。その笑顔を見てわかった。

彼は初めてだったのだ。

驚いたなんてものじゃない。こいつ馬鹿か、とは何度も思ったことだったが、この時ほど呆れたことはなかった。何も言えずに立ち尽くしたスレインに、伊奈帆はご飯にしよう、と言ってまた笑った。その顔を見ていたら涙がまた溢れてきて、伊奈帆はスレインの肩をぽんぽんと叩いた。ほら、何が食べたい？　って言って。

あの時、僕はここで生きることを決めたんだ。

「ん……あ……あ……ア、伊奈帆、……もう」

ひっきりなしに声が出る。指しか入っていないのに、体中がどろどろに溶けてしまいうくらい気持ちがいい。声が枯れて喉が痛い。気づくといつの間にか、腰の下に枕が敷かれていた。快樂に反応して跳ねる腰を受け止めて、もう弾力性は失われている。

伊奈帆が、スレインの開いた足を肘で持ち上げてにじり寄った

「もう、入れていい？」

いちいち聞くな、と思うが言葉にならない。こくこくと思いい切り首を上下に動かす。伊奈帆が指を引き抜いた。

「あ……は、あ、ア……！」

両手で腰を掴まれ、その感触に喉の奥が震えた。ああ、入ってくる。早く早く。ぐつと押し付けた塊の小さい皺の一つ一つ、形の細部までわかるくらい、そこが喜びを以て柔らかく開くのがわかった。少し入ってきただけで、体中に甘い痺れが広がる。手

の先へ、足の先へ、指の先へ。温かい何かが行き渡る。ああ、すごく、すごく気持ちがいい。それ以上に、泣きたいくらいの幸せを感じた。体だけではなくて、どこかの隙間が埋められたような、欠けていたものを見つけたような安心感に包まれた。手を伸ばすと、握られた。指を固く組まれ、嬉しくて涙が頬を伝った。

最後まで合わさって、しばらく体を寄せ合った。胸がぴったりくっついて、お互いの鼓動の速さが少し違うのがわかる。少しずれたメトロノームみたいだ。それが心地いい。伊奈帆が、スレインの背中に腕を回して引き寄せた。対面に座るつもりだと分かり、肘について体を起こそうとするが上手くいかない。伊奈帆が肩の下に手を指し込んで引つ張った。繋がったまま体を動かすと、中で擦れて何度か声が漏れた。伊奈帆はその度、耳や顎に口をつけて髪を撫で、それにまた嬌声がかかる。

向き合って座り肌を感じると、どちらともなく動き出した。スレインは少し下にある頭を抱えこんで、弾力のある髪を掻き回す。伊奈帆の吐く息が耳の近くを何度も掠めて、もう何も考えられないくらいだ。接合部がぐちゅぐちゅと音を立てる。ああ、また香りがする。すごく濃い。吸うと、どんどん気持ちよくなる。もう体のどこが動

いているのか分からないくらい、スレインの体中が迎え入れた他者を歓迎していた。

「あア………！ ……あ、……ア、ア……！」

「…っ、ごめん、ちよつと、余裕ないな…」

「ひ、あ……！ ……イ、……い、……あ！」

下からくる、速さを増す律動に、動きを合わせて応える。もう、どこまでが自分で、どこからが伊奈帆なのかわからないくらいになっていく。でも、もつと。

「は、……もつと、……ア、い、いな」

伊奈帆の背中にしがみつく。肩甲骨の出っ張りに指をかけて、離れないように体をくつつける。汗で張り付いた胸の間で、チェーンがカラカラと揺れた。伊奈帆の手が、力強く背中を締める。もつともつと、近づきたい。一つになりたい。

「スレイン…っ」

「伊奈帆…、あ、ア……！」

赤い。いや、違う。なんだろう。体の奥から、痺れが波のように寄せて返し、どんどん大きく深くなる。背中が伸びて、足も手も伸びきってその痺れを余すことなく行

きわたらせようと硬直する。目が開く。開く。まて、何かある。瞼の裏に。波が来る。まだだ、また。ああ、見えた。赤い。違う、橙の。波がまたくる。ああ、あれは。ああ、そうだ。夕日だ。

「あア——…！ ア…ア、ああ…！」

体が、注がれたものを残さず搾り取ろうと強張って痙攣する。生まれて初めて感じる凄まじい快感に、息ができない。口を開いたり閉じたりして、何とか空気を吸おうとしていると、伊奈帆が頭を支えて口を口で塞いできた。ふう、ふう、と喉を空気が通り抜けていくのがわかった。数度繰り返して、顔を離すと心配そうな顔があった。スレインは伊奈帆の汗で張り付いた前髪を指でかき上げて、笑いかける。ほつとしたように伊奈帆も微笑んだ。

「…抜くよ」

「いちいち、聞かなくていいから…」

ずるり、と内部を占めていた体積が失われて、そこがひくひくと物欲しそうに動いた。かあ、と頭と顔に血がのぼる。全く、いちいち聞くから恥ずかしい。寝転んで、

枕に顔を埋めた。ふわりとブランケットが肩にかかる。ベッドのスプリングがきしみ、伊奈帆が横に寝そべったのが分かった。後頭部に微かな重力を感じる。伊奈帆の指に髪が梳かれていた。心地よくて、瞼を閉じる。伊奈帆の手が、後頭部の形を追う。耳の後ろを触つて、また髪を梳く。しばらくそうしていた。スレインは薄く目を開けた。気づいた。

首の後ろに、血流が集まっているのが分かる。ナイフで裂いたら、きっと噴水のように勢いよく血が噴き出すだろう。伊奈帆の指が、首の後ろの触れるか触れないかのところをゆっくりと撫でた。じんわりとした快感が背筋を抜けた。

「あ……」

伊奈帆が一瞬指をひっこめたが、何かを確かめるように、今度はまっすぐ揃えた指でもう一度、触る。指は震えていた。固く伸ばしていた指は、次は首の曲線にそって曲げられた。温かい手の平の感触が心地いい。そういえば、こんな風に触る奴なんて、いなかったな。耳の近くで、声がした。

「……ここを」

掠れた声は、止まった。躊躇うなんて、界塚伊奈帆らしくない。でも、その優しさが嬉しかった。スレインは頷いた。

「…いい」

さっきまであんまり声を上げていたものだから、喉に引つかかって上手く発声できなかった。聞こえたかどうかは怪しい。でも、見上げると見下ろす橙が静止して細められた。わなわなと唇が震えているのが至近距離でよく見えた。

「噛むよ」

首の後ろがざわざわと別の生き物みたいに猛っている。こんなところが、何かを求めるのは初めてのことだ。肉を突き破ってほしい。血を飲んでほしい。唾液を傷口に落としてほしい。そして、この体をただ一人のものにしてほしい。首がそう言っている。

「ああ…」

抱き寄せられ、上半身を支えられ起こされた。伊奈帆の肩に頭を預ける。彼の心臓が驚くほど大きく打っているのが分かって、背中に腕を回して軽く叩いた。自分の名

を呼ぶ声が聞こえた。耳が熱い。体中がスーパみたくに蕩けそうだ。息を潜め、その瞬間をじっと待つ。早く来てほしいような、ずっとこの瞬間が続いてほしいような、矛盾した気持ちだった。

伊奈帆の唇が、スレインの項の皮膚に数度触れ、離れてを繰り返した。初めてキスをするティーンエイジャーのような触れ方に、スレインは気持ちがおぼれるのを感じた。いちいちうるさくて情緒に欠ける奴だけれど、こういうところが好きなんだ。スレインは目を閉じたまま、くすぐったい感触に身を任せる。時が止まった。

歯が、当たった。

一度引いて。

また、当たる。今度はゆっくり、皮膚に食い込んでくる。ああ、気持ちいい。もつと。

ぶつり、と肉が破れた。たらたらと生暖かい血液が首を伝う。歯は、さらに奥へ進む。もつと奥。そう、もつと。ぞわぞわと体中に鳥肌が立った。ああ、もうそこまできている。声が勝手に漏れ出る。

「あ…あ…！」

一瞬、自分がいなくなったように意識が止まった。そして次に、何か一つの物に合わさったような不思議な感じに包まれる。体の境界線がなくなったよう。一つの器に入れた液体のように、もう分けられないような混ざり合った感触。

「スレイン」

ふわり、と何かが香った。この部屋の空気が変わり、温度までも変わったようだ。スレインはうつすらと目を開けた。見えるはずもない景色が見える気がして、もう一度目を閉じる。

ああ、これは百合だ。草原で風に揺れる大輪の白い花。緑の中に、たくさん。風が吹く。草がさざめく。木々が揺れ、果実が踊る。美しい光景が浮かぶ。

微かな痛みと、甘くとろりとした感覚が血管を辿り神経を辿り体中に広がっていくのが分かった。日の光をいっぱいに浴びた、初夏の甘い果物の香りがする。それと、温かい香り。大きく息を吸い込むと、体が楽になった。首の後ろの切り傷はもう痛くない。血は止まったらしい。体に回された伊奈帆の腕を手のひらで辿ると、お返しと

いうように手の平が肩から肘を撫でて手を握った。熱い手。指の間に指を差し込むと、ぐっと力が込められた。

「伊奈帆」

スレインは伊奈帆の前髪を掻き上げた。膝を立てて背伸びをし、もう開くことのない左眼窩に唇で触れる。目を開け顔を離し見下ろすと、伊奈帆は泣きそうな顔で見上げていた。この男のそんな情けない顔は、初めて見たかもしれない。

「伊奈帆、君に出会ってよかった」

「ああ……」

背中に戻された腕は、初めて回された時より力強くて、伊奈帆が押し付けた顔から出た水分で胸が濡れた。癖のついた後頭部を撫でると、水滴が落ちた。もらい泣きとは、自分も随分、年を取ったものだ。スレインは伊奈帆の髪に顔を近づけキスをした。